

光合成を学び 環境考える

尾張旭・旭小で特別授業

尾張旭市の旭小学校で15日、植物の二酸化炭素（ CO_2 ）の吸収量を調べる特別授業があった。脱炭素社会

実現に取り組む人材を地域一体で育成しようと、市が地元の名古屋産業大と進めるゼロカーボンスクール教



長谷川さんの指導で、植物の CO_2 吸収量を調べる児童たち＝尾張旭市の旭小で

育の一環。

同大から植物生態学が専門の長谷川泰洋准教授（45）が、ネパールから留学中の大学院生3人とともに同小を訪問。6年生約80人が授業を受けた。

児童たちは校内のビオトープでクスノキやキンモクセイ、ウメなどの枝葉を切り、 CO_2 濃度を測る機器とともに容器の中へ。教室内と日光の下での吸収量の違いを調べた。児童からは「モミジやイチヨウは、紅葉してから光合成できるのか」「落ちている緑色の葉っぱは」などと質問も。長谷川さんは「緑色の時に比べると、光合成の量は減るはず」「落ちていても、葉っぱの細胞が生きていれば、しばらくは光合成できている」と答えていた。参加した福和里空叶さん

（11）は「光合成を習ったときは本当かなあと思ってたけど、実験で分かって驚いた。植物の力はすごい」と振り返った。長谷川さんは

「子どもたちが身近な環境に関心を持ち、行動を考えるきっかけになれば」と期待した。

（鳥居彩子）